

竹田画帖における構図の特質 《船窓小戯帖》・《亦復一楽帖》を中心に

吉村富美子（大阪府立大学大学院）

《船窓小戯帖》・《亦復一楽帖》は田能村竹田晩年の代表的な画帖作品で、一画面中に書と画をあわせ持つ。《船窓小戯帖》については竹田の旅程と交友をめぐる考察が、また、《亦復一楽帖》については藤懸静也氏や桜井成明氏など、古くから竹田とその友、頼山陽との交友をめぐる考察が多く、伝記的事実の解明は進んでいるが、画風の造形的分析はあまり見られない。近年になり河野元昭氏の研究のように、詩の解釈と画の造形についてより詳しく分析されるようになってきた。しかし、書と画の造形的な関わりについての考察は極めて少ない。笠嶋忠幸氏が『文人画展』図録（出光美術館（大阪）、1996年）において、書と画による画面構成に着目されている程度である。笠嶋氏の指摘は、書と画の画面上の構成について竹田の作品を一例として挙げるが、個々の作例について具体的な分析はされていない。

本発表においては書と画の関わりに注目された笠嶋氏の研究を受け、竹田の書と画による画面構成に着目し、竹田の画帖の造形的特質を明らかにすることを目的とする。

発表者は竹田画帖の題詩の部分を文字のかたまり、すなわち文字群としてとらえる。その上でそれらを四角型・変形四角型・入組み型に分類する。それらと絵画モチーフとの対応関係をそれぞれ検討することにより、文字群の形と絵画モチーフの形が造形的に呼応しているという、竹田画帖の特質を明らかにする。大雅・蕪村の《十便・十宜図》の場合は、笠嶋氏が言われるように書の配置が画の紙面構成に従属していると考えられる。しかし竹田の場合はこれと異なる。画面上にあらわされた題詩は意図的に不揃いに改行され、その行末は絵画との境界に入り組んでいる。これはモチーフと詩文が形の上で呼応したものと言える。これに類似の構成は、『芥子園画伝』初集第五冊に見られることも指摘したい。

このように、竹田にとって画帖の題詩は、絵と分けられるものではなく、絵の主要なモチーフと詩文の構成は造形的に呼応する。このことから、詩文は絵画全体の一部と考えられる。またそれは、詩文と絵画の一致を造形的に表現しようとした竹田絵画の極めて重要な特色と考えられるのである。